

## 研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山大学大学院人間発達科学研究科
- ・所属ゼミ スポーツマネジメント研究室
- ・指導教員 神野 賢治 准教授
- ・代表学生 金田 華実
- ・参加学生 久湊 太雅・村瀬 仁志・沖田 諒・岩原 純子・  
後藤 舞子・徳本 千尋・永井 駿也

### 【研究題目】朝日町発祥“ビーチボール”をさらに普及させるには？(B部門)

#### 1. 課題解決策の要約

ビーチボールは、朝日町に在住(通学)する若年層(児童及び生徒)において、“競技”としてのビーチボールの存在に加え、“町発祥のスポーツ”としても広く認識されていることが明らかとなった。今後はより一層の普及を目指すためにも、同町で開催される諸大会を競技参加以外の観点からも充実させることが、大会等の価値を高めることにも繋がるものと期待する。具体的なアクションとしては、

- 1) 地域発祥スポーツとして、競技の魅力を多面的な観点から児童及び生徒にも伝承すること
- 2) ビーチボールを行なう場面は、学校教育機関及び行政機関と連携を図り、展開すること
- 3) 地域で開催されるビーチボール大会は、現行の大会参加年齢に限らず、地域住民全体(多年代)で行なうこと  
を提案する。

#### 2. 調査研究の目的

##### 1) 課題の整理

朝日町教育委員会と体育指導委員協議会によって「町民ひとり1スポーツの推進」を目標のもと1977年に現代のビーチボールの起源となるニュースポーツが誕生した。その後、1986年に富山県ビーチボール協会が設立されると、1993年には日本ビーチボール協会が発足した。いずれの協会も朝日町に事務局が置かれ、以降同町は“ビーチボール発祥の地”としてビーチボールにゆかりのある地域となった。競技が誕生してから30年以上が経過したが、近年は大会参加者が減少しており、その原因の1つとして少子高齢化や若年層に対する普及の低さが挙げられる。

ビーチボールの普及策の検討とともに、青少年(特に、児童及び生徒)における教育的位置づけ(スポーツの多様性を知る教材)と今後の展望について言及する。

よって、本研究では、朝日町の教育機関(町立あさひ野小学校・町立さみさと小学校・町立朝日中学校・県立泊高等学校)に通学する青少年(具体的には18歳以下の児童及び生徒)を対象とし、以下の目的でフィールドワーク研究調査を実施した。

- ① 児童及び生徒の運動・スポーツ参画への実態や町に対するイメージ(帰属意識)を明らかにする。
- ② ビーチボールに対する認知度や認識を明示し、ビーチボール(大会)に対するニーズの発掘を試みる。
- ③ 教育機関(学校)において、朝日町の各学校教員(保健体育科教員)はビーチボールをどのように位置づけ、扱っているのかを明らかにする。
- ④ スポーツへの多様な関わり方を学ぶ題材として、持続可能性のあるビーチボールの普及を検討する。

### 3. 調査研究の内容

#### 1) 朝日町教育委員会スポーツ係へのヒアリング及び意見交換会、 ビーチボール施策を展開するスポーツ施設の視察

朝日町教育委員会事務局の協力のもと、例年町内で開催されている大会に関する文献や資料を得た。大会参加者の動向や課題等を、同町教育委員会スポーツ係と確認した。60歳以上の者が参加対象となる“翡翠カップ”ビーチボール全国大会の参加人数及びチーム数は、増加傾向にある。一方で、18歳以上の者が参加資格をもつ全国ビーチボール競技大会の参加人数及びチーム数は、2003年に開催された第49回大会を境に、徐々に減少傾向を辿っている。競技者の高齢化が進行し、近年は若年層(学生)を対象とした全国学生ビーチボール大会が開催されるようになった(2019年度で第4回を迎えた)ものの、若年層の競技人口は拡大していない。尚2020年度に予定されていた上記大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、全て中止された。



写真1 朝日町文化体育センター(サンリーナ)へのヒアリング調査の様子



写真2 朝日町教育委員会スポーツ係との意見交換会の様子

#### 2) ビーチボールの競技特性を知るための実技研究会

ビーチボールは「いつでも どこでも だれでも」手軽に楽しめるスポーツとして謳われている。ビーチボール未経験者を含む調査員と当町教育委員会事務局職員、朝日町地域おこし協力隊(スポーツ分野)によって、試合に適用されるボールやルールの特徴の確認を行い、実戦形式で実技研究を実施した。



写真3 実技研究会の様子(朝日まちなか体育館)

#### 3) 朝日町スポーツ推進委員協議主催「にこにこスポーツ広場 ビーチボール」視察

2020年11月14日に、町内に在住する幼児から中学生を対象としたビーチボール体験教室が開催された(参加者は3~14歳)。参加者には年齢の差があったものの、いずれの年齢においてもボールに触れることや試合体験が十分に行なわれている様子を確認することができた。



写真4 ビーチボール教室の様子(サンリーナ)

#### 4) 朝日町の児童及び生徒、保健体育科教員に対する調査

同町の教育機関(学校)に通学する児童及び生徒を対象とし、朝日町教育委員会事務局協力のもと郵送によるアンケート調査を実施した。調査期間は2020年12月15日から12月24日であった。各学校全ての在校生を対象とし、配布部数は769部、うち768部を回収した。そのうち669部の有効回答を得ることができた。有効回答率は、87.0%であった。

朝日中学校、泊高等学校に勤務する保健体育科教員に対し、同様の方法・期間で調査を実施した。配布部数は4部、全てを有効回答とした。

### 4. 調査研究の成果

#### 1) 町内に通学する児童及び生徒の特性

本調査において、性別では「男子」が52.8%、「女子」が47.2%であった。居住地は、中学・高校生においては町外から通う生徒が一定数確認されたが、回答者全体を通して82.0%は町内在住の児童・生徒であった。年齢は、小学校低学年(6~8歳)16.1%、小学校中学年(8~10歳)15.2%、小学校高学年(10~12歳)18.1%、中学生(12~15歳)27.2%、高校生(16~18歳)23.3%であった。

「朝日町が好きか」の項目は、小学校高学年以上の児童及び生徒に対し「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法で訊ねたところ、「とてもそう思う」、「まあまあそう思う」を合わせた割合が50.6%と半数を占めた。また、小学校4年生以下の児童は同項目において「好き」「きれい」「わからない」の3件法で訊ねたところ、87.6%が「好き」と回答した。一方で、「将来は朝日町で暮らしたいか」についても同様に小学校高学年以上の児童及び生徒に5件法で訊ねたところ、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」を合わせた割合が低いことが明らかとなった(図1)。

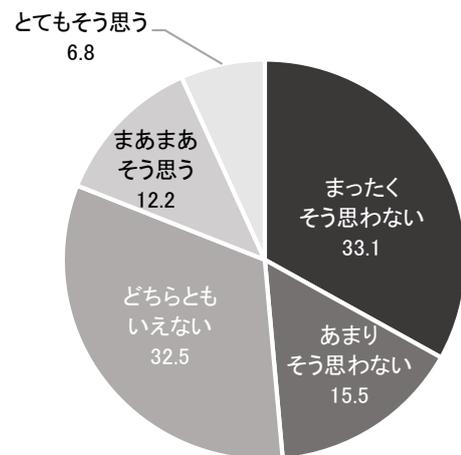


図1 将来は朝日町で暮らしたいか(%)

#### 2) 町内に通学する児童及び生徒の運動・スポーツ実態

小学校高学年以上を対象に、運動習慣について訊ねた。高学年は平均163.9回/年、中学生は平均205.7回/年、高校生は平均88.3回/年であった。運動・スポーツ観戦頻度は、高学年5.00回/年、中学生4.80回/年、高校生4.61回/年であった。校種が上がるにつれて、運動・スポーツに触れる機会は減少傾向にあると捉えた。

運動・スポーツに対する意識は、小学校低学年から小学校中学年は、「することが好き」と答えた児童の割合が84.8%、「みるのが好き」と答えた児童の割合は64.3%であった。高学年以上の児童及び生徒に対しては、「するのともみるのとも好き」「どちらかといえばする方が好き」「どちらかといえばみる方が好き」「するのともみるのともきらい」の4件法で訊ねた。全体では、する及びみる双方の観点から運動やスポーツを意欲的に捉えていることが示された(図2)。

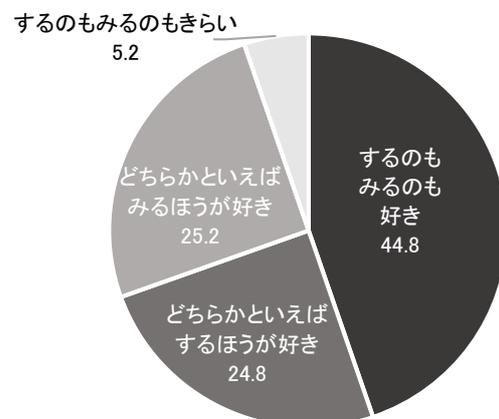


図2 運動・スポーツに対する意欲(%)

### 3) 町内に通学する児童及び生徒のビーチボール認識

ビーチボールをした経験について、全体でみると経験が「ある」児童及び生徒は 84.2%と高い割合を確認することができた(図 3)。それに伴い、町発祥のスポーツとして認知されていることも示された(図 4)。児童全体でみると、学年が下がるにつれてビーチボールが認識されている割合は低くなっているものの、小学校中学年以下の児童においても「知っている」割合が 46.2%と半数近くを占めた。また、ビーチボールを初めて行なった際は、「友達」と行なった児童・生徒が 53.8%であった(図 5)。これは、競技を行なったきっかけが「学校の授業」の割合が高いことも関連していると推察される(図 6)。「家族」や「地域の人」と行なった児童及び生徒の傾向として、学校で扱われる以前にビーチボールに触れる機会を獲得しているといえる。

また、「ビーチボールのよさ」について訊ねたところ、「気軽に楽しめる」24.7%、「ルールが簡単である」18.6%が上位項目となった(図 7)。親しみやすさに対する競技特性は、児童及び生徒にとっても重要であることが確認された。また、「友達と仲良くなれる」11.5%、「地域の人と仲良くなれる」8.0%を示したことから、競技を通して、周囲の者との交流機会としても機能していることが推察される。

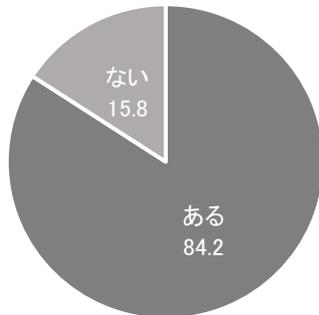


図3 ビーチボールをした経験(%)

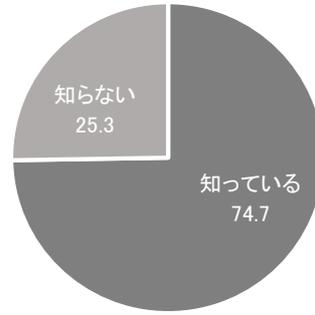


図4 朝日町発祥スポーツの認知(%)

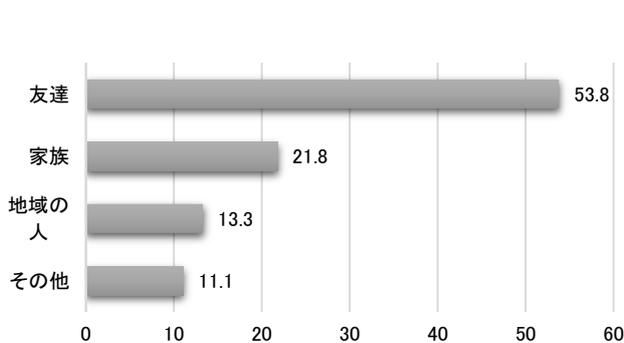


図5 ビーチボールを初めて行った人(複数回答, %)

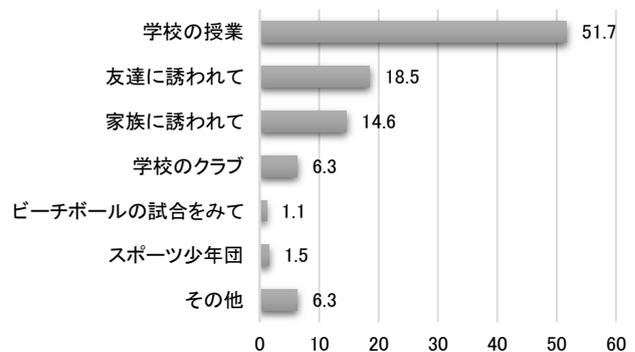


図6 初めてビーチボールをしたきっかけ(複数回答, %)

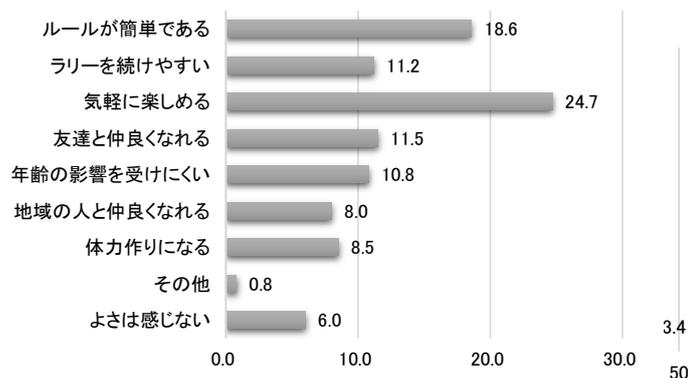


図7 ビーチボールのよさ(複数回答, %)

一方、町内で開催されている主だった大会の認知について、小学校高学年以上の児童及び生徒は「全国ビーチボール大会」が 25.7%、「翡翠カップビーチボール大会」が 16.4%であったが、およそ 4 割の児童及び生徒は大会を認知していないことが明らかとなった(図 8)。このことから、ビーチボールに関わる経験は児童及び生徒にとって学校内で留まっている傾向にあるといえよう。

「ビーチボールの大会に行ったらやってみたいこと」を訊ねたところ、小学校中学年以下の児童においては「試合をみてみたい」「試合の応援をしてみたい」に対する回答が「試合をしてみたい」よりも高い値を示した(図 9)。また、大会に「行きたくない」割合が比較的低いことから、ビーチボール競技に対して広く関心を持っていると捉えることができる。一方で高学年以上の児童及び生徒については、同項目で「観戦」が比較的高い割合を示したものの、大会に「行きたくない」割合が最も高かった(図 10)。ビーチボールの大会に対する関心は、年齢によって違いがみられることが示された。

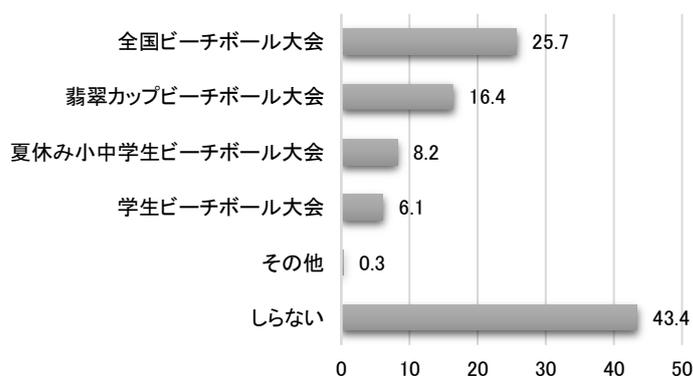


図8 認知しているビーチボール大会(複数回答, %)

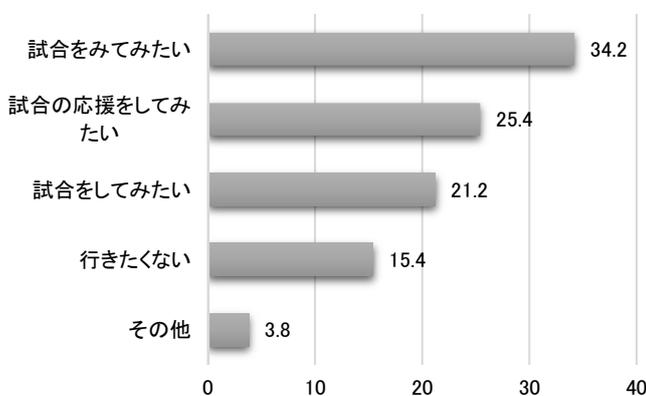


図9 大会に行ったらやってみたいこと(複数回答, %)

※小学校低学年, 中学年 (n=210)

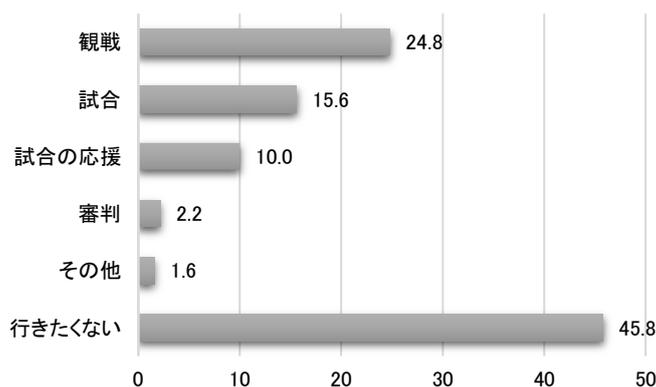


図10 大会に行ったらやってみたいこと(複数回答, %)

※小学校高学年以上 (n=459)

#### 4) 保健体育科教員によるビーチボールへの取組み

「ビーチボールを扱う場面やビーチボールに抱く印象」を自由記述で求めた。「体育、バレーボールの導入段階でビーチボールを行なうこともあった」「総合的な学習の時間で扱う時は、町ビーチボール協会へ依頼して、生徒との対戦、交流を1時間ではあるが行なっている(町のスポーツを紹介するうえで)」などの回答を得た。具体的な場面については、体育大会及び球技大会の学校行事、総合的な学習(探究)の時間、ホームルーム時に実施されていることがわかった。競技的側面から、用具や試合の扱い(行い)やすさなどが重視されていると推察する。

#### 5. 調査研究に基づく提言

文部科学省では2017年3月、第2期「スポーツ基本計画」を策定した。「スポーツ基本計画」は、スポーツ基本法の理念を具体化し、スポーツに関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るための重要な指針である。2020年の先を含む5年間(2017年4月～2022年3月)のスポーツ政策として、スポーツを「する」「みる」「ささえる」といった多様な形で「スポーツ参画人口」を拡大することを目指している。

ビーチボール競技の普及に至る為に、まずは発祥地域(朝日町)に在住及び通学する児童・生徒に焦点をあて、ビーチボールのよさを多面的に感じる(学ぶ)機会の提供を一層推進することが必要であると考え。若年層(児童及び生徒)におけるビーチボール競技の普及は、ビーチボールを“する”ことに留まらず、競技を“みる”ことや“ささえる”観点からも拡大することが可能であると考え。ビーチボールの認識を町民同士(大人から若者へ)で深めることにより、地域発祥スポーツとしての競技の伝承や同町で開催される競技会への関心、更に地域に対する帰属意識の向上にも寄与すると考える。

#### 6. 課題解決策の自己評価

本調査研究は、朝日町内に所在する学校に通う児童生徒に対するビーチボールの認知把握に留まった。同町内に通学する児童及び生徒に対するビーチボール競技に対する経験や関心の高さは、一定程度確認されたといえる。フィールドワーク研究活動を通して、その要因は町職員らによる教室の開催や競技施設の充実などが関係していると推察する。また、町内で開催されるビーチボール大会への関心や意欲の向上を図ることによって、町への帰属意識にも変化がみられることにも期待する。本研究成果を基に、今後においても教育機関(学校)及び行政機関と連携を図り、引き続き持続可能性のあるビーチボールの普及の在り方を検討していきたい。

調査に先立ち、全面的に協力を頂いた朝日町教育委員会事務局の皆様をはじめ、同町ビーチボール協会職員・スポーツ推進委員の皆様、朝日町地域おこし協力隊(スポーツ分野)八巻未来様、一般社団法人朝日町文化・体育振興公社、係長中島篤司様、並びに町立さみさと小学校、あさひ野小学校、朝日中学校、県立泊高等学校の児童・生徒の皆様、教職員各位に感謝申し上げます。